



Title	府民に身近な樹木の害虫
Author(s)	木村, 裕
Citation	makoto. 1992, 78, p. 2-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

府民に身近な樹木の害虫

大阪府農林技術センター

環境部長 木村 裕

農作物、樹木、花などに害を与える虫を農林害虫と言っていますが、これらの中には私たちに直接害を与えるもの、不快感をもよおすもの、大切にしている植物を枯らしてしまうものなど多くの害虫が含まれています。農林害虫となると一冊の本ができるほど範囲が広がりますので、今回は私たちの家の周りにごく普通に発生する害虫の主なものについて、診断のポイント、被害の特徴、防除のポイント等を整理してみました。花にひらひら訪れる美しいチョウも幼虫時代は虫嫌いな人にとっては不快な虫、あるいは大切な花を食い荒す憎き虫ですが、都市に残された貴重な生きものとして、少しぐらいは目をつむってじっと成虫のチョウになるのを見守って欲しいものです。

被害の特徴と防除のポイント

1. カイガラムシ類

各種の果樹や樹木に寄生する害虫で、葉や枝から養分を吸いとり、枝を枯らすばかりでなく、ときには樹を衰弱させて全体を枯らすこともあります。また、洋ランや観葉植物でもよく発生します。

外観が貝の殻に似た形をしていることから介殻虫

(カイガラムシ)と呼ばれていますが、日本には500以上の種類が記録されており、その形は千差万別で、生活方法も異なっています。私達が虫と思って見ているのは、虫が体から分泌したロウ物質が堅くなったもので、外敵から身を守るよろいみたいなものです。いつもこのように保護された状態にありますので、防除のむづかしい害虫のひとつとなっています。

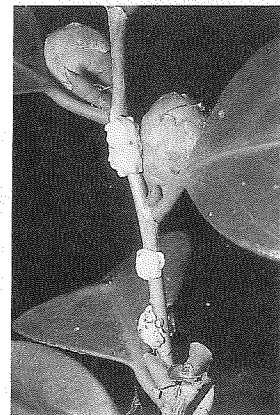
虫の一生は、卵→幼虫→蛹→成虫と変化してゆきますが、雌成虫には羽根がないのが特徴です。また、種類によっては雄成虫が現われず、雌成虫のみで単為生殖を続けるものもいます。通常、卵は殻の中で産まれ、ふ化した幼虫がそこから這い出して四方八方へ散らばっていきます。手頃な場所が見つかった汁を吸い始めると足は退化し、再び移動することはありません。雄はやがて蛹を経て、3～5mmのハエのような成虫になりますが、雌は幼虫と同じ形をしたままで殻の下で寄生生活を続け、やがて100～500個の卵を産んで一生を終えます。

カイガラムシ類はいつも殻の下にいますので、防除対策としては見つけしだいこすり落すことです。薬剤散布を行う場合には、卵からふ化幼虫が一斉に

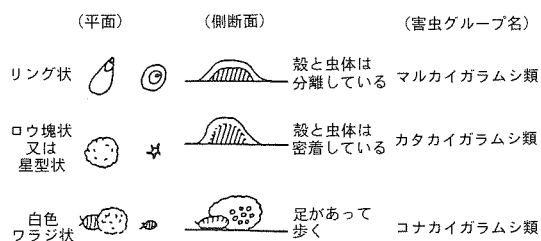
主なカイガラムシ類と特徴

害 虫 名	代表的な寄生植物	色、形の特徴	防除適期
カタカイガラムシ類 ツノロウムシ	ツバキ・サザンカ モチノキ	白色、ロウの塊り	7月上中旬
ルビーロウムシ	ゲッケイジュ・ツバキ サザンカ	チョコレート色、"	"
カメノコロウムシ カシニセタマ	マサキ ウバメガシ	白色、" 黄褐色	" 冬又は6月中下旬
カイガラムシ フジツボカイガラムシ タマカタカイガラムシ	サンゴジュ・シイ類 ウメ	ラグビーボール状 灰褐色、おわん状 赤褐色、球状	6月上中旬 6月上中旬
マルカイガラムシ類 ウメシロカイガラムシ アカホシマル	サクラ・ウメ・モモ 観葉植物	白色、円盤状 褐色、"	5月中～7月下旬 周年
カイガラムシ ヤノネカイガラムシ	ミカン	紫褐色 先とがり長円盤状	6月上中旬、8月下旬
コナカイガラムシ類 ミカンコナ カイガラムシ	観葉植物・温室性花き	白色、綿状	周年
その他 サルスベリフクロ カイガラムシ	サルスベリ	白色、俵状	冬

ツバキ



ツノロウムシ



カイガラムシ類のグループ別特徴

這い出す時をねらうのが最も効果的ですが、その幼虫は小さいのでまず見つけることは不可能でしょう。通常、園芸好きな人が虫を発見したときは、虫の発育段階は成虫期で最も防除のむづかしい時期としてみてください。逆に、多くいた虫が目立たなくなった、又は消えてしまった時期が幼虫のふ化期で防除適期です。

カイガラムシ類の被害は、直接の吸汁害ばかりでなく、虫の排せつ物が枝葉に付着し、かつそれにすゝ病も誘発されるため、枝葉は黒く汚れ、美観が悪くなります。

カイガラムシ類の天敵として多くの寄生蜂がおり、発生量のバランスをとっていますが、車の通行が激しい道路沿いの地帯では、寄生蜂が排気ガスを嫌って逃げるため、しばしば大発生します。その典型的な事例としては、庭に植えたモチノキで、へいを越えて道路の方に伸びだした枝にロウムシ類が多発するのに対し、へいの内側ではほとんど発生しないという現象も見られます。

一般にカイガラムシ類の防除対策として、冬期にマシン油乳剤（又は機械油乳剤）の散布がよいとされていますが、万能ではありません。比較的殻の薄い虫には効きますが、殻の厚いロウムシ類（枝に付着した5～10mmのロウ状の虫）に対してはほとんど効果がありません。このロウムシ類は防除の最もむづかしい虫で、防除適期（7月上中旬）をはずすと手でこすり落とす以外に有効な方法はありません。防除適期の散布では、スプラサイド乳剤、カルホス乳剤、アクテリック乳剤の効果が高く、1～2回の散布ではゞ全滅できます。

2. アブラムシ類

バラの新芽に群生する緑色の虫を筆頭に、各種樹

木の葉、草花の新芽に数十～数百匹の虫が群生します。樹木では多発しても葉や枝が枯れることはありませんが、大量の排せつ物が葉に付着するので、葉や枝はべたつき、さらにすゝ病を誘発し、黒く汚れます。草花では、吸汁により葉に生氣がなくなるほか、新葉がねじれて奇形になることもあります。

アブラムシと言うと台所を這いずりまわっているゴキブリとよく混同されますが、まったく別の虫です。アブラムシはアリマキとも呼ばれ、カイガラムシに近い虫ですが、ゴキブリはバッタ、シロアリに近い虫です。

アブラムシの一生は、成虫→幼虫→成虫→幼虫の繰り返しで蛹の時代はありません。通常、成虫は雌成虫ばかりで雄成虫は見られません。また羽根もありません。一匹の雌成虫は毎日4～5匹の幼虫を産み、その幼虫は7～10日後には新成虫となって新たに幼虫を産み始めるので2～3週間後には1000匹前後の虫の集団となります。また虫の数が増え過ぎると、羽根のある成虫が現われて新しいすみかを求めて移住します。

春から秋まで増え続けた虫も寒くなり始めると、雄成虫が現われ、交尾後の雌成虫は卵を産み、卵の状態ですぐ冬越しをします。しかし、家の中や温室など暖かい場所に置かれた鉢植えの植物では冬でも休まずに活動を続けます。

防除のポイントは早期発見、早期防除です。防除が一週間遅れると、虫の密度は10倍以上に増え、薬剤からもうまく逃れる虫も多くなります。防除薬剤としては、スミチオン乳剤、オルトラン水和剤、マラソン乳剤、DDVP乳剤（デス）などがあります。

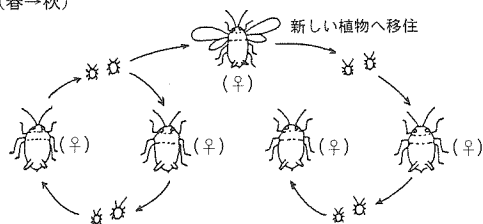
ダイシストン粒剤やオルトラン粒剤などの粒状の

ユキヤナギ

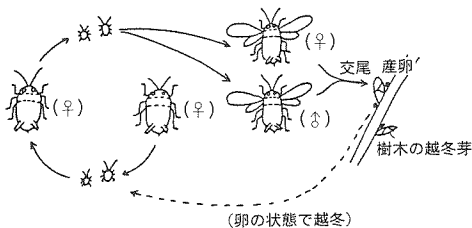


ユキヤナギアブラムシ

(春→秋)



(秋→春)



アブラムシ類の生活スタイル

薬剤は、株元にばらまいておくだけで、殺虫成分が根から吸収されて葉上にいる虫を防除する力がありますが、樹木ではまったく効果がありませんので注意してください（草花、野菜のみ）。

3. 毛虫類

アメリカシロヒトリを筆頭に多くの毛虫が樹木の葉を食い荒し、ときには葉を食いつくして樹全体を丸坊主にすることもあります。また、ほとんどの虫が毛に毒がありますので、手を触れないように注意してください。

アメリカシロヒトリは街路樹に発生する代表的な毛虫で、集団生活と糸を吐いて巣をつくる習性があります。サクラ、プラタナス、ニセアカシヤなど多くの樹木を害します。

チャドクガはツバキ、サザンカにつく黄褐色の毛虫で、一枚の葉に数十匹の毛虫が一行に並んで葉の裏側を食害します。そのため、被害の始まりは虫のついた葉が1～2枚褐変するのが特徴です。また、毛の毒は強力で、葉上に残った毛虫の脱皮殻に触れてもかゆみを生じます。そのため、人によっては虫の発生している樹の側を通ただけでもかぶれることがあります。

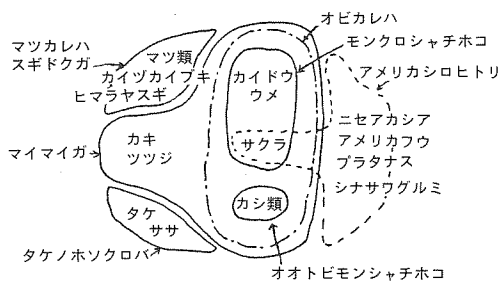
マツカレハは、マツ類の葉を食害する大型の毛虫

で、早春から活動し、多発すると5～6月頃に樹は丸坊主になります。この虫によく似た虫（マイマイガ）がカシ類で発生します。また、サクラではオビカレハという毛虫も発生しますが、この虫は糸を張り渡して巣をつくる習性があります。いずれも毛には毒がありますので、手を触れないよう注意してください。

モンクロシャチホコは8～9月に集団でサクラの葉を丸坊主にする毛虫で、アメリカシロヒトリと混同されています。体色が赤褐色又は黒褐色であるので区別できます。毒はありません。

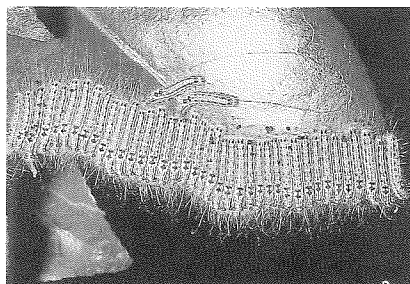
最近多くなっているのがイラガ類で、長い毛はありませんが、体には刺状の突起があり、手を触れるとすどい痛みを生じます。いろいろの樹の葉の裏側にいるため、庭仕事などによく被害を受けます。種類としては5～6種いますが、多いのはアオイイラガ、ヒロヘリアオイイラガ、ヒメクロイラガです。

防除のポイントとしては、虫の集団が見られる葉は切り取り処分をします。大型の毛虫は見つけしだい割りばしなどで捕殺するとよいでしょう。薬剤散布は小さな幼虫の頃をねらってください。大きな



毛虫類と加害植物

サザンカ



チャドクガ

主な毛虫類と特徴

種 類	体色、その他の特徴
マイマイガ	黄褐色～黒褐色 黄、赤、青色の毛束が斑紋状にある
アメリカシロヒトリ	黄褐色、集団で巣をつくる。
オビカレハ	灰青色、背面に黄色の帯が前方から後方へ連なる
モンクロシャチホコ	赤褐色又は黒色 体をくの字に曲げる。集団生活
オオトビモンシャチホコ	赤褐色、集団生活
チャドクガ	黄褐色、葉裏に行列し、集団生活
タケノホソクロバ	橙色、黒色の毛束が斑紋状にある。
マツカレハ	灰色
スギドクガ	鮮緑色

ると効果は低下します。防除薬剤はチャドクガを例にとると、ディプテレックス乳剤、トアロ水和剤CT、デミリン水和剤、オルトラン水和剤、スミナイス乳剤などが効果が高いようです。また、エアゾール剤もよく効きます。

4. アリ類

アリが樹の根元に住みついたので樹が枯れた、アリがアブラムシを運ぶなど言われているが本当でしょうか？ 答はノーです。

アリはアブラムシが排せつする甘い液体を集めるのが仕事で、アブラムシのいる所には必ず何匹かのアリが走りまわっています。しかし、アリに比べアブラムシの数が多すぎると排せつ物が余り、葉を汚し、すゝ病を誘発することになり、掃除係として役に立つ面もあります。アリはこのような甘い液体をくれ

るアブラムシを保護するために、天敵のテントウムシ類を追い払う点では害虫になりますが、アブラムシを運ぶことはまずありません。また、樹の根をかじることもありませんので、根元に巣ができて樹は枯れることはありません。

アリの防除薬剤としては、アリアートル、アリアサルなどの誘殺剤があり、アリの通路に置いておくだけで2～3日後にはいなくなります。

5. その他

アジサイ、ツバキ、ツツジなどの枝幹に白色の綿状物がつき、カイガラムシのように見えますが、これはアオバハゴロモと言う虫で手を触れると、ピョン！と跳びはねます。カイガラムシやアブラムシの遠い親戚にあたる虫で、樹液を吸っていますが、実際の被害はほとんどないのでそのまま放っておいてよいでしょう。

ミノムシは樹木にごく普通にいる虫ですが、雌成虫には羽根がないため、いつも同じ樹で多発する傾向があります。ミノを開くと黒色の虫が見られますが、これは幼虫です。成虫になると雄は褐色の蛾になって飛びまわりますが、雌成虫は蛾にはならず、幼虫によく似た姿で、体全体が乳白色になります。交尾した雌はミノの中で数百個の卵を産みますので、7月頃、その周囲に小さなミノムシが無数に発生することになります。

おわりに

樹木、草花を害する虫には、汁を吸うもの、葉や根をかじるもの、新芽の生長をとめるものなど、数多くおり、種類が何であるかを決定するには、その虫の特徴を十分に把握する必要があります。一般家庭、造園業者、公園管理者などからの相談も最近非常に増えていますが、虫の特徴を十分にとらえられておらず、種名の判定に苦労しているのが現状です。防除の基本は虫の名前の確認が第一歩ですので、少くとも、植物名、被害症状、虫の大きさ、形、色、足の有無などをよく観察してください。たぶんこれで虫の名前はわかると思います。いろいろの虫が身のまわりにたくさんいますが、有益なもの、有害なものを仕分けして、人、植物、いきもの、お互いに妥協点を見つけて調和のとれた自然を維持したいものです。

